

ときめきインタビュー



松浦 真弓
まつうらまゆみ / Mayumi Matsuura

…プロフィール…

昭和40年、草加市生まれ。埼玉県立越谷北高等学校から東海大学短期大学部へ進み、卒業後の昭和61年、宇宙開発事業団（現・JAXA 宇宙航空研究開発機構）に入社。新卒入社した女性技術者第1号として、衛星やロケットの軌道追跡、国際宇宙ステーションの実験棟『きぼう』および補給機『こうのとり』のフライトディレクターを担当。現在は筑波宇宙センターで、SSA（宇宙状況把握）システム開発プロジェクトの指揮を執っている。



宇宙ステーション補給機『こうのとり』宇宙では秒速7kmの速度で動く

宇宙開発事業団の最新女性技術者第1号として入社以来、30年以上にわたって第一線で活躍している松浦真弓さん。日本初となる平成20年の有人宇宙実験施設・日本実験棟『きぼう』と、27年の宇宙ステーション補給機『こうのとり』5号機の打ち上げの際は、地上の運用管制チームのリードフライトディレクターを務め、プロジェクトを成功に導くなど輝かしい実績を残しています。

★宇宙への興味は先生の一言から

松浦さんが宇宙に興味を持ち始めたのは、小学校低学年のこと。

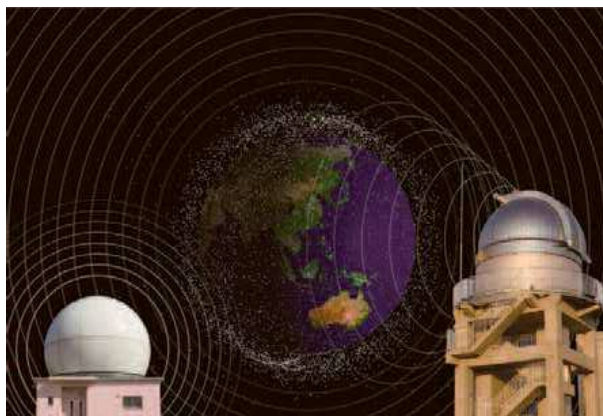
「理科の授業のとき先生が、宇宙の果てはまだ誰も知らないんだよ」と言っていました。大人でも知らないことがあるということが当時の私には衝撃的で、それが宇宙に興味を持つきっかけでした。その後、中学3年生のときに「コスモス」という宇宙・キョメソタリー番組を見て、こういう仕事になりたい！と意識するようになった。

などと衝突しないようにするSSA AI（宇宙状況把握）システムを開発するプロジェクトを率いています。

「チームというのは、各自の能力の足し算ではなく、かけ算で人数以上の成果を上げることだと思います。チーム全員が気持ちよく仕事できるように配慮して、プロジェクトを成功させるのがリーダーの役割。当然プレッシャーはかかりますが、やりがいをを感じる仕事ですね」

★「地球を眺めながら月で一杯」が夢

人工衛星やロケットの追跡、宇宙ステーションに関わる業務など、宇宙を観る仕事を続けてきた松浦さんには、実現したい夢がある。「地球全体が眺められる場所から、地球は本当に丸いのか、どんな青色をしているのか、オーロラは本当に南極と北極で同時に発生しているのか、自分の目で見てみたいですね。例えば、国際宇宙ステーションの高さはおよそ400km。でもその距離では残念ながら地球全体は見えないんです。全体を見るなら月に行くのがベストかもしれません。誰でも宇宙旅行で月へ行けるようになったら、私も月に行つて、地球を眺めながらお酒を飲みたいですね」



松浦さんが開発プロジェクトを率いるSSAシステムのスペースデブリを観測するレーダー（左）と光学望遠鏡（右）のイメージ

越谷に住んでいる人達にも、もっと宇宙を身近に感じてほしい

★10年越しの『きぼう』打ち上げ成功

入社当初は、すでに宇宙で稼働している人工衛星を追跡し、軌道や姿勢のずれを計算して修正する業務を担当していました。

「最近の人工衛星は、自動で軌道や姿勢を調整できるものもありませんが、当時は地上でコントロールしなければならぬ衛星がほとんどでした。最初に配属された部署は、大学の研究室のような雰囲気があって、働きながら勉強している感じが楽しかったですね」

その後、ロケットの追跡業務などの経験を経て、入社13年目の平成10年に国際宇宙ステーションに設置する日本実験棟『きぼう』の運用管制チームのメンバーとなりました。

★3拠点に日本人がそろった奇跡

「きぼう」の成功によって、日本人だろつと。そういう視点で見れば宇宙が身近に感じられて、興味を持ってもらいやすくなったと思います。筑波宇宙センターにある展

示館では、『きぼう』や『こうのとり』などの実物大の模型を見ることが出来ます。皆さんに来てもらえたらうれしいです」

本当に地球は丸いのか、青いのか。いつか自分の目で見るのが夢なんです。



JAXA 追跡ネットワーク技術センターのSSAシステムフライトディレクター

まつうらまゆみ 松浦 真弓さん

筑波宇宙センターの展示館にある日本実験棟『きぼう』の実物大模型。大きい装置のため、打ち上げは3回に分けて行われたそう